



「桃源郷こびら」、江藤さん宅の夕食風景



江藤さん自慢の手作り石釜で焼いた、絶品ピザ

福岡での仕事を辞めて 研修生として働く道を選ぶ

入交律歌さんは島根大学で森林環境について学んだ後、九州大学大学院で山村経済と森林政策を専攻した。大学時代には日田や隠岐の島へ赴き、農林業をボランティアとして経験している、山と森を愛する人物だ。そして、地球温暖化や砂漠化といった世界規模の環境問題に元々関心を持っていた入交さんは、日本の木を利用することでの国内外の環境改善を志している。

しかし、過疎化や高齢化、経済的な問題から、現実として日本では林業を生業として成立させることは難しく、山から人が離れていく。そんな状況を変えるために、入交さんは「まず田舎を好きになつてもらいたい」と言う。そのために、やわらかい入り口として「グリーン・ツーリズム」や「食」に興味を持ち、九州の自治体のグリーン・ツーリズム組織が、いかにしてマチの人々へその魅力を訴えているのかを、大学院で研究していた。なお、入交さんは大学院の時に、調査で宮崎県諸塚村に何度も通っていた。そこでの聞き取り調査や地域の人々との交流といった経験が、グリーン・ツーリズムに魅かれた最大の理由だということだ。その後、入交さんのもとに、諸塚村で2009年11月から新しく農泊がスタートしたという連絡が入り、2010年2

修学旅行やイベントで 貴重な即戦力として活躍

「地域には初めからすつと自然に入れました。まるで前からいたように」入交さんは言う。自然で明るく、活発な雰囲気の入交さんは、最初から、地域に入っていくことに抵抗感はなかったようだ。しかし、努力が必要なかったわけではないだろう。元々働き者で苦勞を苦勞と思わずに頑張れるタイプなのかもしれない。NPO 法人安心院町グリーンツーリズム研究会事務局で働き始めた入交さんを待っていたのは、修学旅行シーズンだった。日々を学校の入退村式と資料作りで追われて

題への意識が高く、入交さんは同誌の環境特集にグリーン・ツーリズムに関する企画を提案していた。

ちょうどその頃、NPO 法人安心院町グリーンツーリズム研究会事務局長の植田淳子さんの記事を読み、営業をするつもりで話をしに行つたのだという。しかし、そこで安心院町の魅力を知り、ちょうど平成21年度の「九州ムラの生業プロジェクト」という絶好の機会があることを知った。そして、植田さんの誘いもあって、「九州ムラの生業プロジェクト」の研修生として、安心院町で働くことになったのだ。福岡で就職してから、わずか4カ月。運命と言うしかないだろう。



訪れた農泊家庭で食事をいただく入交さん。これも仕事のうち



ポニーに朝食を食べさせる入交さんと江藤さん

月には研修の場に講師として安心院町の農泊実践者2名と共に招かれた。村との交流は今も続いている。

ただ卒業後は、いきなり環境や林業に携わるつもりはなかったという。何年かマチで「伝える」ノウハウを得たかったのだ。そのために、フリーペーパーを出版している福岡の会社へ就職する。同誌はタウン誌だが、社会問

いた入交さんは、事務局で仕事を見て覚えたという。そんな入交さんを、植田さんは「最初から即戦力で、助かっています」と評価した。

先頭に立って少数精鋭のスタッフを引っ張ってきた植田さんは、「NPOは他の会社組織と違って、何事も自分でやっていかなくては

いけないんです。でも、私は人を育てたことがないので、充分なフォローができていませんね」と言う。何でも1人でやってきた植田さんにとって、受け入れ側の課題だ。だが、植田さんいわく「しつかりした」入交さんは、植田さんの背を見て成長しているようだ。

さらに、安心院町では莫く様々なユニークな形に束ねる「全国薬草大会 in 安心院」が開かれてきたが、10周年をもって一旦終了し、新しい形のイベントとして、「第1回大分・安心院スローフードフェア」を開催した。入交さんはその運営スタッフの中心として、事前の招待チケットの管理からスケジュール管理、当日のイベント進行まで走り回った。

受入家庭代表で、NPO 法人大分県グリーンツーリズム研究会の事務局長であり、農泊の最古参リーダーの1人、望月陽子さんは、「きちっとして、それでいてカタクも神経質でもない。理解力があって、計画のまとめ方がうまいですね。すぐに農泊のお母さんたちの信用を得ましたよ」と語る。